

第71回 埼玉県美術展 審査評

【第4部 工芸】

○総評

審査主任 関井 一夫

県展が再開して2年目となりました。応募総数は前回の301点を大きく下回り235点でした。内訳は、一般158点、会員77点、その内入選数は一般が84点、会員が56点で合計140点、入選率にして59.6%となりました。しかしながら、その内容はこれまでの県展を大きく下回ることもなく、今回展では新しい技法の作品や確かな技術に支えられた労作が目を引きものになりました。

一方で、公募作品を受け付ける工芸界全般の問題ではありますが、分野の不明確なものが目立ちました。素材・技法・技術として我が国の近現代以前を支えてきた造形分野の集合体でもある工芸は、今日でも様々な技術・材料で作られたものの受け口ともなっています。作品を出品する時「何でもとりあえず工芸」にではなく、工芸という表現領域をよく学び、制作・出品されることを望みます。しかし、公募団体展での分野分類や、工芸の中で新しい表現を模索すると、既成の分野では表せない領域に入ることがあります。精緻な技術に支えられた素材を活かす濃密な創作作品であれば、分野の着地点は見つかるはずですが、継続しつつ高みを目指す挑戦に期待します。

今回から新たに設けられた高校生等を対象とする受賞部門ですが、高校生等だからといって手心は加えず、工芸部門としての基本である完成作品としての傷・亀裂や技術・造形としての安易な制作に対しては一般作品と同様に厳しく評価してもらいました。残念だったみなさんに一言「工芸では失敗が大切です。失敗には次のステップに高める学びがあります。なぜ失敗したか？次はどうすればいいのか？その問いから解を導き出し進んでください。ダメなんじゃない。自分を高めるチャンスが目の前に生まれただけです。」

○埼玉県知事賞

「光陰」 望月 龍輔

フィレンツェの伝統工芸品マーブル紙を陶芸で表したような爽やかな作品です。技術的には墨流しという技法で、流動的な磁土又は陶土に酸化金属の顔料を入れ、攪拌し、その液の中に素焼きした作品を素早く浸し掛けして紋様を写し取るものです。県展にこうした技法で出品されたものは珍しく、審査員全員に好印象を与えた作品です。

○埼玉県議会議長賞

「雷鳴」 後藤 恵子

友禅染の筒描きによる比較的新しい手法を主体に制作しています。紺地に色糊による赤、緑、ブルーグレーに本来の糸目糊の生地白が効果的に意匠化されて構成され、タイトルの雷鳴が印象的に伝わってきます。さらに細の薄地に金銀の顔料を大胆に扱うことによって全体的に完成度の高いモダンな秀作となっています。今後の展開を期待しています。

○埼玉県教育委員会教育長賞

「^{はなすじ}華筋」 ^{とうじんばら}唐仁原 ^{ますみ}ますみ

平織りの着尺であるが、縦糸の並べ方の一工夫で、表情豊かな仕上がりになっています。これまでの織りの経験が活かされた熟練した秀作です。

○埼玉県美術家協会賞

「^{ほうよう}抱擁」 ^{いのうえ}井上 ^{みちよ}美千代

抱擁というタイトルのオブジェ作品です。確かな技術に裏打ちされた多様な技法を駆使し、内なる想像力を熟成、具現化して、見る者に現実を超えた不可思議な空気感を楽しませてくれます。作品に対峙し見つめると、様々なイメージが喚起され、ひと時空想の世界を遊ぶ事が出来ます。実力表現力共に優れた作品であると思われまます。

○埼玉県美術家協会賞

「^{かたつむり}蝸牛」 ^{かわぼた}川羽田 ^{たくと}匠登

一枚の銅板から叩き出した鋸起作品です。胴体の赤は滑りの肌合いを、背中に乗った殻は錫を焼き付けたようなまだら紋様の上から鑿（たがね）の線を入れることで硬さをと、表現方法を変えることで工夫された蝸牛になったと思われまます。細い二本の角が一枚の板から打ち出されたことには驚かされます。次回はどのような表情の生き物が登場するのか期待と同時に楽しみです。

○埼玉県美術家協会賞

^{どろしつぽうはないれ}泥七宝花入「^{しよしゅう}初秋の森」 ^{もり}原 ^{はら} ^{たみこ}民子

通常の有線七宝の原点となった泥七宝、真鍮線とピンホールが、素材である泥の味わいを際立たせています。色数が少ないという中での表現は、焼成回数の多さも含めて困難を極めるものです。「派手さ」は無いですが泥の存在感を見せてくれました。

○テレビ埼玉賞

「^{あまね}遍」 ^{こづか}小塚 ^{ももえ}桃恵

県展では非常に珍しい作品です。仏像彫刻の加飾として発展した截金技法は、金箔を竹刀で極細の線に截り、接着剤として膠（にかわ）を筆に付け、筆で箔を置いて行きます。

伝統的文様の「麻の葉」ですが、中心から外へ形作っている線が外されてゆくことでグラデーションを見せています。幾何学的模様の変化が美しいです。

○高校生奨励賞

「^{たかくてきしや}多角的視野」 ^{いとい}糸井 ^{かずま}一真

陶のオブジェ作品のようであり、壺のような形状から花器のように見立てることもできる作品です。技術的な点や造形的なバランスに未成熟なところは見えますが、挑戦的なテーマには若々しさが溢れています。これから進学も控え新たな表現に挑むこともあろうかと思われまますが、継続して作品を制作しながら研鑽を積み重ねることを期待したいです。

○埼玉県美術家協会会長賞

ほんゆうぜんぞめきもの はるびより くろだ まり
本友禅染着物「春日和」 黒田 眞理

友禅染めの中の本友禅染による作品です。本友禅染めの特徴は、多色の模様染といわれ、絵画的で緻密な表現を可能にした技法です。「春日和」と題する黒田氏の作品は、その技法の特徴を効果的に活かした優作となっています。ライトブルーグレーの地色に芥子の赤を主に、白と紫陽花の配色が美しいです。素直な構成・表現ですが、糸目糊の技量も確かで、鑑賞者に心地よい印象を与えます。

○高田誠記念賞

たなかようへん か き りゆうせん さかえ かずお
炭化窯変花器『流線』 榮 一男

氏は熟練した作家です。今回の作品も非常にシャープで、花器の中心に流線を施して緊張感をもたらし、炭化焼成による窯変が花器に一層の深みを与えている秀品となっています。